

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	蹴球部遠征 : 部報
Author(s)	尾崎, 達男
Citation	龍南, 230 : 65 - 68
Issue date	1935-02-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7248">http://hdl.handle.net/2298/7248</a>
Right	

## 蹴球部遠征

しよぼ／＼と冬雨が降つて、午後五時の熊本はどんよりと煙つてゐた。

熊本驛頭に十時校長及蹴球部長池田先生、他に先輩補欠等に見送られて遠征の途に上つたのは舊臘廿八日の事であつた。

博多で九大の先輩に激勵を受け密柑、菓子等を貰つて年末の混んだ山陽線を眠られぬ儘に、夫等を食つて過した。

翌朝も不相變の曇天で時折細い雨脚が車窓に筋を引いてゐた。神戸、大阪には過ぐる夏の風害の跡も見られた。

切と行かう。目的地京都に着いたのは廿九日午前九時半。時しも京洛は雨中に沈み、東山三十六峯は雨雲の彼方に姿を隠してゐる。今は昔、劔戟の喧しかった壬生、祇園、三條のほとりは何と自動車電車の聞くも忌はしい音ばかり。

餘談は抜きにして、三十日に一時間、三十一日に半時間の練習を、やつとなし得たに過ぎなかつた。三十一日大晦日の午後一時から京大の集會所で懇親會が開かれた耳に近い早稻田の「都の西北」とか、一高の「嗚呼五杯に花うけて」とかが歌はれた。私達は「武夫原頭に草萌えて」をいとしとやか(?)に歌つた。聞く者の中には啞然と口を開けてる者もゐたです(?)

主將小林は實に拙籤上手です。見事不戦一勝となり二日の午後二時弘前高校と組む事になつた。

明くれば正月元旦、諸君が屠蘇に酔つたり雑煮で腹を壊したりしてゐられる頃、私達は試合を明日に控へ、屠蘇をも口にせず、ひたすら英氣を養つてゐた。

試合は岡崎グラウンドで平安神宮の前。北は北大豫科から南は我五高迄全國高校廿二校が集つた。(七高は遠征費を總務が出し呉れないので來なかつた由、こんな總務つてあるでせうか?)

二日目、弘前との試合には充分の勝算があつた。併し弘前は名うての亂暴者、聞けば一間位向ふからタツクル

に飛び込んで、足一本位平氣で折つちまう由。「まるで猪の様な奴だ。」と誰かど云つた。今年が猪の年だとは云へ、まあよくも正月早々から猪に出會はしたものだと思つた。

昨夜の雨で出来たグラウンドの泥濘も、午後になつて割合によくなつた。寒くもなければ暑くもない。時々、時雨を含んだ雲が大文字山の上の方から流れて行く。觀衆は老若男女、グラウンドの周圍に人垣を作つて、タツチ、アウトした時ボールを止めて呉れるに都合がいゝ。正月とは云へ此の觀衆の多いのには全く驚かされた。女學生も大分來て居た。

對弘前扱、午後二時、準備運動は終つた。先輩、佐藤、中西、原田に「必ず勝て」と宣言された。今や選手の緊張は極度に達した。張り切つた此の意氣。私達は意氣丈でも斷然敵手を壓倒してゐた。微風一陣、戦は敵のキックオフで開かれた。試合は始めから斷然五高が押して居た。前半チャンスは屢々あつたが、辛くも一點を取つたのみで、敵のバックよく守つた。R I、C Fの奮闘姿

く、ハーフサイド、よく敵のパスをカットした。我フオアードのパスワークもコンビネーション通りに綺麗に行つた。C Fの球捌きよく兩ウイング、よく之を受けてセンターリングした。一度は惜しい哉、L Iのシュート弱く敵のキーパーに掴まれ、C Fのチャージを旨く外して危機を脱した。併し實力の相違如何せん。L Wドリブルしてゴール前に近づきフリーになつてシュートした球はボールとすれ／＼にゴールインしたキーパーに取つては最大の難球。觀衆の歡聲湧き立つ許り。

後半に入つては練習不足の爲か、敵は疲勞の極に至り少しも動かなくなつた。

四日對廣高戦、廣高は二日優勝候補東高を二對〇にて破つた傳統的強味を有するチーム、一同緊張して對戦した。五高、先蹴調子悪くゴールキックコーナーキック等攻め込まれたが敵策を誤つてウイングに欠陥あり、味方の兩フルバックの捨身のタツクルに得點を許さず屢々逆襲に出づるもバックのフォーロー無く得點に至らず、兩軍フオワードの不振に前半を終る。後半、敵のキック、オ

フをカットして出でCHよりRWに更に中央送球LW強蹴するも惜しくも外る。その後壓迫され屢々ピンチに陥るもGKの好防に得點を許さず。タイムアツプ五分前RIのバツクパスをCH狙つたが僅かに外れ敵そのゴールキツクを持ち込み俄然ピンチ、されどLI凡蹴に終る。そのまゝタイムアツプ直ちに延長戦に入る。兩軍やうやく疲れて悲壯な戦となり必死に戦ふも一進一退を繰り返しそのまゝ終る。

抽籤（五十本中若い番數を引いた方が勝ち）の結果十九番と二十番で勝つ。いさゝか氣の毒なり。

翌五日準決勝對一高残るは二高六高一高五高等ナンバスクールのみ。相手一高は、大會隨一の技倆を有し加茂兄弟吉田等の大學選手を擁する早高を破り北海の強剛北大豫科を斥けた洗練されたチーム。捨身の一戦に出る。

五高先蹴敵のハーフ斷然強く突破出來ず苦戦。十六分バツクせるRI市山RW松本にパス、それを中央送左球側一齊にダツシュ、ゴール右側に上るをCF筑瀬よく跳込み巧なヘツディングに一點先取。廿分より一高強攻を

続けハーフからの送球CFマークを外してシュート、同點となる。五高攻めたてるもハーフタイム。

後半、一進一退兩軍必死の攻防戦、劣勢裡にタイムアツプ

延長、五高先蹴猛烈に攻めたてゝ二分CH小林強蹴一度弾きかへされたがCF筑瀬取つてクリンシュート左隅を割り再びリード。その後壓迫を続け五分コーナーキツク市山の好蹴CH小林ヘツド惜しくもボールを掠める。八分三十米前にフリーキツクを取られ、之を防いでGK青柳跳上るも一高フォワードの反則氣味のチャージに仆れ起たず、二分間タイム。直後切込まれバツクの疲勞にクリヤ出來ず混戦中キーパー僅かにハムブルするを押込まれ折角のリード空し。後半キツクオフの球を持込まれコーナーキツクを取られ、ゴール前混戦となり漸く疲勞氣味のバツクメンのチャージ弱くLIにヘツドを許しリードさる。その後奮起せるも一高俄然好調となり敵陣突入ならずタイムアツプ。

優勝を目前に残念至極、先輩の慰めあつたが皆諦め切

れぬ面持に悄然として引上ぐ。

他の組では六高勝ち翌六日の決勝戦は一高の蹂躪する所となり三對〇にて一高優勝、之につけても一高に勝たざりしは返すくも残念。蛇足の如くなれども第三者の公平なる批評として蹴球界の大先達山田午郎氏の對一高戦の批評を掲ぐ。以て蹴球に關する認識を深めらるれば幸甚と存する次第。

對廣島試合を見た目には五高は一高の敵ではなからうと思はれたが、強引の試合を進め二度迄リードしながら自陣混亂の隙を衝かれて敗れた。1―0 2―1のリードの蔭にはGK青柳の健闘と相當好運も手傳つて居たが守勢から攻撃に轉ずるのにW形を良く利かし時にパントの攻法を取る等捨て難い所があり試合を重ねて悔り難い所を見せた。此の敗戦も惜しまれるものと云へる。一高は對北大戦に見せた威力に欠けて居た。FW線のパス、ワイクの悪いのは五高守備線の潰しがよく利いて居たのもよるが之を突き捲るる氣力が乏しかつた爲自然攻撃は變化を認め得なかつた。優勢な試合をしながらソードを

奪はれて居たのも此處に原因して居た。併し最後の止めを刺したのはさすが巧者の賜ではある。

(昭十、二、十尾崎達男)